道場の経営戦略

― 実演家から見たマネジメントの重要性

[日 時] 平成29年7月3日(月)18:30~20:30

「会 場] 沖縄産業支援センター

「参加人数」 22名(受講者20名、関係者2名)



[講師] 高瀬将嗣(高瀬道場代表/殺陣師/映画監督)

日活の殺陣師だった父の跡を継ぎ、テレビドラマ「特捜最前線」で殺陣師デビュー。「ビー・バップ・ハイ・スクール」の技斗(現代劇アクション)が評価され、多くの作品のアクション指導に携わる。監督業へも進出し、劇場映画やVシネマ等50余作品を演出。最新作「昭和最強高校伝 國士参上!!」は全国主要都市の単館で公開、新作「カスリコ」がこの春封切予定。日本映画監督協会理事。「映画の日」永年勤続功労賞受賞。

時代の変化に応じて、どのようなビジョンを持って道場の舵取りをすべきか。道場経営で培った、相手との信頼構築と常識にとらわれない経営方針について事例と共に紹介。

●生徒に長く続けてもらうための安全補償とケア

松草師とは、映画やテレビ、舞台の中で、格闘の振り付けや演出を行う人たち。殺陣は、武道や格闘技から派生したように見られがちだが、あくまでも演技であり、競技とは別のジャンルである。

ただ、殺陣はスポーツや武術と同様に身体を使うため、怪我の危険性が潜んでいる。高瀬氏が運営する「高瀬道場」では、生徒が入門する際に保険加入を条件としている。生徒にとって保険自体は出費になるが、万が一何かあったとき、安全のケアと補償は金銭的なものでしか対処できない。道場側でも包括保険に加入、2重で担保することで生徒も安心してレッスンが受けられるように仕組みを整えている。

●道場経営の転換期

1971年に、高瀬氏の父・將敏氏は、殺陣師として後進の育成を行うために「高瀬道場」を設立。しかし、1978年に突然將敏氏が倒れ、急遽高瀬氏が道場を継ぐことになるが、都心から1時間ほど離れた府中市の道場はアクセスも悪く(当時。現在では所要時間が半分に改善)、経営の危機を迎えた。それを打開す

るべく1993年に道場を建て替えるも、建築基準法の 関係上、道場のキャパシティは60畳から40畳に縮小 せざるをえなかった。

そこで、それまで殺陣師を目指す男性に限定してきた道場だったが2001年に児童部や女性クラスを開講。女性用の更衣室やシャワー室を整えるなどして、経営方針の転換を行なった。その結果、生徒は女性の割合が多くなり、大手プロダクションからも多くの女優の殺陣指導を任されるようになる。

●海外文化に応えて、進化する殺陣のアクション

道場でワークショップを行なったときに、生徒の一人から「先生は殺陣や技斗で、実際に攻撃を相手に当ててはダメ、と教えていますよね?」と質問され、「危険だからね」と答えると、「安全だったら当ててもいいのですか?」と言われた。安全の裏付けがあれば、顔は別にしても身体への直接打撃は迫力が増し、リアリティのある演技につながる。このやりとりが転機となり、映画「ビー・バップ・ハイスクール」で実践したところ、作品の高評価につながり、道場にも生徒が増えていった。



映画「ビー・バップ・ハイスクール」撮影時の様子

また、海外普及の一環として、2000年にタイで開催した国際交流基金の支援によるパフォーマンスでは、殺陣の演技が海外の方にも喜んでもらえる手応えを感じた。

海外公演では功夫映画のニンジャのような激しい演技を求められた。そのニーズに応える形で、演出をあえて過剰に、魅せる演技を心がけた結果、現地の方にも喝采される。海外での経験を踏まえて、高瀬道場の師範がフランス映画「WASABI」やハリウッド映画「ラスト・サムライ」でアクション指導を請け負うなど、海外からの仕事の受注にもつながった。

●相手に信頼してもらうための考え方

近年、道場に通う生徒は、「レッスンの時間を買っているのだから、時間内で分かりやすく教えるのが指導者の義務」とシビアな考えを持つ人が増えてきた。 それを受け止めたうえで、お互いの信頼関係を醸成するためには「礼儀」と「挨拶」が必要という。

初めて会った人に対する礼儀として「おはようござ

います」「こんちには」と挨拶することは、相手に自分を認識してもらう最初のサインとなる。殺陣やアクションは相手との呼吸が合っていないと危険で拙い殴りあい、斬り合いに終始してレベルの低い演技となってしまう。道場経営では、時代の変化に対応しながらも必要な伝統は守るようにしており、それが礼儀と挨拶だという。指導者に対する信頼があればこそスキルの上達にもつながる。ちなみに高瀬道場の師範は生徒に対して敬語を使っている。

また、女性の生徒たちのモチベーションをあげるための取り組みが紹介された。女性用の稽古着のリニューアルを行い、道着を白、袴を紫というオシャレな色味にして、動きが楽な軽い生地を選び、自宅でも洗濯が可能な素材に改善。それが話題となって、女性の入門希望者の増加につながった。なによりも、生徒さんが快適に過ごせる空間づくりの演出と、レッスンが楽しみになる環境づくりを一番に考えている。

●労働環境の改善に向けて

高瀬氏は現在、高瀬道場の代表を辞して、タレントを含む実演家の補償問題に取り組んでいる。厚生労働省とも交渉をしてスタントやアクション、殺陣師など危険を避けられない実演家も、労災保険の対象となる労働者として認めてもらえるように働きかけている。組織を率いているアクション監督や殺陣師などは経営者のため労働者扱いされず労災が適用されないが、自費負担の特別加入制度を活用することができる(一般の労災は自費負担ゼロ)。該当する人たちへの啓蒙活動を行い、安心できる現場の条件を整えることに努めていければ、とこれからの労働環境のあり方についても伝えられた。



殺陣師としての苦労や道場経営についてまとめた著書『技斗番 長活劇戦記 〜実録日本アクション闘争記』も紹介された



労災に関する具体的な質問も挙がった